

聖書の物語と私たち ②②
南王国の預言者1 イザヤ

司祭。パウロ 鈴木伸明

預言者イザヤ

皆様お持ちの旧約聖書でイザヤ書を見ていただきたいと思えます。イザヤ書は1章から66章までである大変長く内容の多い書物になっていきますが、内容は大きく3つに分けることが出来ます。最初は1章から39章まで、「アモツの子イザヤ」の預言になっております。そして40章から55章までが無名の著者による希望の預言になっています。これはアモツの子イザヤの時代よりかなり後（捕囚時代以後）の内容となっております、当然著者も違うと考えられています。そこでこの無名の著者を「第二イザヤ」、同様に56章以下を「第三イザヤ」と呼んでおります。

南ユダ王国ではウジヤ王の後に王となつたヨタムが世を去り、その子アハズが王となつていました。紀元前8世紀前半の頃です。時の北イスラエル王国のペカ王は、他国の王と共にエルサレムに攻め上つてこようとした（イザヤ書7章1節から2節）。恐れたアハズはアッシリアの王ティグラト・ピレセルに忠誠を誓って贈り物をし、その危機から

救ってもらえるよう使者を遣わしました（列王記下16章5節から6節）。これに対しイザヤは主なる神の指示のもと、この攻撃を恐れてはならない。ユダの勝利と安全を、天上にあつて歴史を支配しておられる主なる神にのみ求めることを告げたのでした。しかし攻撃を恐れるアハズは主なる神の勝利を信じて立ち上がることは出来なかつたのです。

そしてかつての同胞が北イスラエル王国を滅ぼそうとしているアッシリア帝国に贈り物をして、アッシリア帝国の力をもつて南ユダ王国を守ろうとしてしまつたのです。

紀元前722年、アッシリア帝国はついに北イスラエル王国を滅ぼしました。アッシリア帝国は今や大国、アハズ王が贈り物をしていたからと言つてその支配を南ユダ王国に及ばせないはずがありませんでした。

ついにアッシリア帝国は南ユダ王国に攻め上つてきました。紀元前711年の反アッシリア戦争の後、アハズ王の次に王となつていたヒゼキヤは705年エジプトと同盟を結び、エジプト後援の中でアッシリアと戦



中塚 梢 画

おうとしました。イザヤはエジプトとの同盟を批判してその危険性を指摘し、軍事力に依存するのは誤りであり、ひたすら主なる神に信頼して穏やかにしていることを勧めたのでした。しかしヒゼキヤをはじめ、エルサレムの指導者たちはイザヤの言葉を聞こうとはせず、アッシリアに対して反抗を続けたのでした。701年、アッシリア

の王セナケリブが攻め上つてきてユダの砦の町がごとごとく占領されてしまします。ヒゼキヤは降伏して貢を納め、かろうじて全面的破壊を免れることが出来たのでした（列王

記下18章13節以下参照）。しかし受けた被害は決して無視できるものではありませんでした（イザヤ書1章7節）。南ユダ王国は、アッシリアによって次第に属領化されていったのでした。

イザヤは主なる神の言葉を、王をはじめ人々に伝え、一貫して信仰に立ち返るべきことを主張し、本当に恐れなければならぬのは唯一の神であることを預言したのですけれど

も、人々は耳を傾けず、この世的な力や他国に寄り頼んだのでした。イザヤの絶望はどんなに大きかったことでしょうか。そうした中、イザヤは主なる神から現実の向こうにある希望を示されました。

見よ、おとめが身ごもつて、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。（イザヤ書7章14節）

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって、今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。（イザヤ書9章5節から6節）

これはクリスマスイブ礼拝等の中でよく読まれる箇所であるのは、皆様よく御存じのとおりです。イザヤは正しく歩もうとしない南ユダ王国の人々に対して耳の痛い言葉を語り続け、多くの苦難を背負つた預言者でした。（川越キリスト教会牧師）